

一般書から専門書へと導く 知識拡張型図書館システムの 研究開発構想

川路崇博

●要約

こと地方都市において、大学は「地域の知」の圧縮と展開を行う「場」としての機能が求められる。稚内北星学園大学では市民講座、公開講座などで市民との連携を深める取り組みを行っているが、市民がより深く「学び」を求めたことを想定した場合、時間的・経済的な理由から、その実現は従来の学校形式での学びは困難が予想される。

そこで、まず図書に着目する。稚内市立図書館の蔵書を調査した結果、開架には一般書が多い。逆ピラミッド型人口分布にすでに突入している稚内市において、生涯学習の機会、そして知的探求の機会を提供するために、市立図書館にはないが大学には存在している図書への誘導手法を検討する。これまでインターネット検索による蔵書検索は実装されていたが、書籍タイトルや書籍基本情報だけではない検索、または図書推薦機構により、別な図書と広く深い知識に行き着けるための支援環境の構築を提案する。

●キーワード

図書館

生涯学習

学習支援環境

場

1. はじめに

図書館はその目的により児童・生徒向けの学校図書館、一般市民向けの公共図書館、公共教育機関の大学図書館、その他特に専門書を扱う専門図書館などが存在する。稚内市においては、雑誌類以外の図書を数多く扱う書店の店舗数が少なく、書店規模も小さい⁽¹⁾。そのような中でも稚内市立図書館の統計情報によると、人口4万弱〔稚内市〕の都市ながらもその利用は、閲覧のみの利用者を含めると年間のべ約17万人弱に及ぶ〔稚内市立図書館〕。これを多いとみるか少ないとみるかは論議が必要であるものの、少なくとも市立図書館が図書への誘導、そして文化的活動拠点として機能していると考えべきである。

一方、稚内市そして半径約150km圏内に唯一存在している稚内北星学園大学図書館は、高等教育にフォーカスした蔵書が充実している。情報メディア学部が設置されている稚内北星学園大学では、学部長が示すとおり情報科学関連図書だけではなく、他の領域に関する図書も横断的に存在する。例えば情報科学関連図書以外に、社会科学に関する図書や数学、教職に関する図書・教員養成向けの図書が挙げられる。これらは、大学図書館としては当然の内容ではある。

しかし、地理的な問題⁽²⁾も含め、大学図書館の図書閲覧・貸出は市民へ一般開放が行われているにも関わらずその利用は限定的である。理由はそもそも大学図書館が市民開放されていることが周知徹底されていないことに加え、一般書と専門書の内容の乖離、そして内容を読み解く方法の支援が不十分であることにあると思われる。

2. 現状

稚内北星学園大学 大学図書館の市民の入館者数を2004年～2008年度のデータを見ると、市民の閲覧者数は毎年10月に異常値が示される。これは毎年この時期に行われる学園祭による、稚内市民の来館によるものと考えられる。また2004年度の8月にも男性の一般市民を中心に異常値といえる閲覧者数が示されている。これは当時、大学が夏休み期間中に行っていた情報技術を中心としたサマー・スクールの影響と考え、閲覧者数の補正を行った。結果、下記表のとおりとなる(表1)。

表1 大学図書館閲覧者数

| 年度 | 大学関係者(名) | 市民(名) |
|------|----------|--------|
| 2004 | 1071 | 341.45 |
| 2005 | 1875 | 475.64 |
| 2006 | 1702 | 547.64 |
| 2007 | 1690 | 559.64 |
| 2008 | 1609 | 546.55 |

数値上は大きな隔たりはないように見えるが、ここで母数にあたる大学内の人数(学生・教員・職員)と市民数は単純比較できない。よってさらなる補正を行う必要がある。補正後のデータは下記の通りになる(表2)⁽³⁾。

表2 母数で補正した閲覧者比率

| 年度 | 大学関係者比率 | 市民比率 |
|------|---------|------|
| 2004 | 5.36 | 0.01 |
| 2005 | 9.38 | 0.01 |
| 2006 | 8.51 | 0.02 |
| 2007 | 8.45 | 0.02 |
| 2008 | 8.05 | 0.02 |

大学関係者では月に10名弱（構成者比）の閲覧があるが、市民は0.1名（6歳以上の人口比）を割り込んでおり、市民が大学図書館へ足を運ぶことは、かなり稀であることが伺える。図書館司書がカウンタに完全に張り付き統計データを取っているわけではなく、また年齢層のカウントも貸出状況の電子化がおこなわれていない状況下あるため、統計データ自体に疑問が残るものの、少なくとも現段階で得られるデータから分析を行うと、市民の大学図書館の利用度・認知度は低いと言わざるを得ない。

3. 研究構想

3.1 より知識を深めるための場としての大学と大学図書館

市立図書館には集客力があり、大学図書館には集客力がないことがこれまでの分析で明らかになった。集客手法そのものの検討ももちろん必要であるが、本稿では蔵書の種別により、また大学が持つ知識に的を絞った大学図書館のあり方と、市民の知識移転手法を検討する。

3.2 図書を用いた大学知識の移転

稚内市立図書館には NDC に基づく E 分類（漫画）が設けられており、最大の蔵書である文学の 9 万冊弱に続く 4 万冊強と大きなシェアを占めている。娯楽としての漫画も確かなにきにしもあらずではある⁽⁴⁾。とはいえ一般図書館としては一つのあるべき姿であろう。

例えば自閉症の学習を行う際に、いきなり自閉症に関する専門書を読むよりも、漫画で描かれたものを選ぶ方法も一つの学習方法である⁽⁵⁾。最も簡単な調べ学習の方法として、ここ数年で普及し始めた Web 百科事典 Wikipedia を利用して見てみよう。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E9%96%89%E7%97%87>

上記 URL をたどると、「自閉症とは『なにか』』について学術的な背景も網羅した形で詳しく記述がなされている。しかし、その分類や特徴から『なにをどうすべきか』についての記述はない。これは「自閉症」という統一した名前は付いているがその対応は人それぞれことなることも要因のひとつであると考えられる。しかし、少なくとも稚内北星学園大学の教員には障害児教育のエキスパートが在籍している。漫画と Wikipedia の記述の溝を埋めるには、大きな負担が必要となるが、大学が持つ知識を利用するとその理解は広まり、深まると考えられる。

これを踏まえると、大学の知識と大学の図書を利用した知識拡張型図書館モデルは下図の通りとなる。

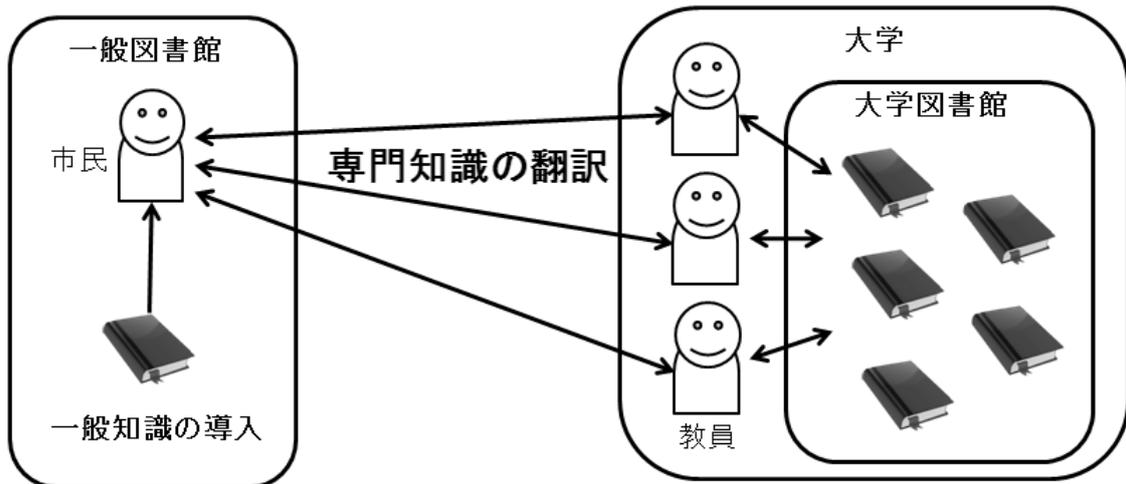


図1 一般書から専門書に導く知識拡張型図書館モデル

市民は一般知識の導入を一般図書館にて行う。この先の振る舞いは、専門分野とダブルメジャー領域を持つ教員を利用し、大学図書の誘導を要請するとともに、その翻訳作業を依頼する。もちろん市民は直接大学図書へのアプローチも可能である。翻訳プロセスに人を介在させることにより、市民はより一層知識を深め、さらには他教員との連携により知識を広げることができる。現在では一般図書館と大学図書館と物理的に分離された形式であるが、人的介在を用いることにより、知識拡張型図書館という“仮想図書館”の構築が可能である。

このモデルの実現には、人的な接合システム構築が必須である。そしてどのような図書が大学図書館に存在しているかだけでなく、興味をもった分野に対応する教員の専門分野・ダブルメジャー領域を公知されている必要がある。

4. まとめ

市立図書館の役割は知識を「広げる」場、そして知識を「深める」場として大学図書館が存在しこれをマージすることにより知識拡張型図書館の構築が可能であるという仮説に基づき、実証実験を行う。実証実験には3章で論じたモデルを用い、これを支援するシステム開発(人的・機械的の双方を含む)とその検証、評価を行う。

まずは、物理的な距離、位置の解消が求められる。国立国会図書館による電子図書館構想に基づき、書籍と書籍の意味を付加することにより、これまで表出しているデータからのインターネット検索だけでなく、学びのプロセスの支援を視野に入れた図書への誘導を目指す。誘導先は稚内北星学園大学の蔵書である専門書をターゲットとし、順次他の専門図書館への誘導を検討する。例えば、最新かつ非常に内容に信憑性が高いとされる論文検索システム CiNii[CiNii] への誘導が考えられる。次に、人的接合性を加味した社会全体のシステム構築を行う。

●註

- (1) 2009年11月29日現在(著者の主観であるが)「書店」と呼べる書店は、数店舗ほどである。「岩波書店の書籍がどれだけ置かれているか」を書店の格をはかる一つの指標としている読書愛好家もいる。理由は、岩波書店の書籍

は書店による買い取りが基本であり、売れないことを理由に返本できない（再販売価格維持に起因する）という部分にある。愛好家たちは、書店が在庫リスクを背負ってでも、書店が文化的な仕事をしているかどうか、を判断しているのである。昨今の新書ブームで岩波新書は売れ筋を中心に置かれるようになったが、岩波文庫を体系的にそろえている書店は稚内市には存在しない。岩波文庫は教養の宝庫としてその地位を確立しており、岩波書店自らも再版に手間を惜しまない。たとえば、マックス・ウェーバー（Karl Emil Maximilian Weber）の「職業としての政治」[Karl]も邦訳が1980年に出版されたが、2009年現在でも版を重ねている（「職業としての政治」は、当時の大学生向けの講演の内容をまとめたものである）。また、1860年のファラデー（Michael Faraday）の講演をまとめた「ロウソクの科学」[Faraday]という現在の中学生の理科程度の内容の書籍も、邦訳は1956年ながらもいまだに再版が続けられている。なお、「ロウソクの科学」は訳者によって若干のタイトルの揺れはあり、著作権の消滅により現在他の出版社からの出版や電子出版（たとえば、プロジェクト・グーテンベルク [Project Gutenberg]）も行われている。

- (2) 稚内市における公共的な施設は、中央地区に集中している。稚内北星学園大学は、市郊外のしかも小高い丘の上に存在しており、さらには大学までの物理的な道路施設も一本しかないため、心理的隔絶感も大きいと思われる。
- (3) 学内人数を200名、市民数を6歳以上の35,000人とする。
- (4) 漫画の古典として再評価がされつつあるものの大型本での「ポーの一族」[萩尾]が存在したり、児童向けテレビアニメのフィルムコミックも多数したりする。注意しなければならないのは、単純に娯楽とするのではなく、親子のコミュニケーションツールとして考えた場合、それらは意味を持つ（一般図書館と専門図書館、大学図書館の違いはここにある）。
- (5) 自閉症には、大きく分類するとアスペルガーとカナーがあることが知られている。主にカナーの児童を主人公にした漫画「光とともに…」[戸部]は、自閉症を理解する上での第一歩となるであろう。

【参考文献】

[CiNii] NII 論文ナビゲータ[サイニイ]、<http://ci.nii.ac.jp/>（2009年11月30日閲覧）

[Faraday] Michael Faraday 『The Chemical History of A Candle』, 1861.

（矢島祐利（訳）：『ロウソクの科学 改訂版』、岩波文庫、1956。）

[萩尾] 萩尾望都 『ポーの一族』、小学館、1976年。

[Karl] Karl Emil Maximilian Weber 『Politik als Beruf』, 1910.

（脇圭平（訳）：『職業としての政治』、岩波文庫、1980年。）

[Project Gutenberg] http://www.gutenberg.org/wiki/Main_Page（2009年11月30日閲覧）

[戸部] 戸部けいこ 『光とともに… ～自閉症児を抱えて～』、秋田書店、2001年。

[稚内市] 稚内市 総務窓口課、戸籍住民グループ、稚内市の人口、

http://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/section.main/sougou.madoguti/jinkou_top.htm（2009年11月3日閲覧）

[稚内市立図書館] 稚内市 稚内市立図書館、平成20年度市立図書館運営実績、

<http://www.wakkanai-tosyo.jp/pdf/20toukei.pdf>（2009年11月20日閲覧）

●英文タイトル

Research and Development of the Library System with Knowledge Extension Leading the Readers from General Book to Specialized Book

●要約

Universities and colleges in regional cities are required to function as "Ba" to compress and expand

"Localized Knowledge". Wakkanai Hokusei Gakuen University holds the open lecture course and other course for citizens to strengthen cooperation with citizens of Wakkanai City. However, if citizens demands deeper learning (Manabi), it will be very difficult for citizens to learn from the ordinary learning from schooling due to the financial reasons and shortage of the time for such learning.

Distribution of Wakkanai Population is so-called inverted pyramid style. Having considered this fact, the method of leading citizens to universities collections of specialized books, which are not available in city library to provide the opportunities for life-long learning and intellectual inquiring is discussed in this paper. Also the construction of support environment to lead a person to the library without using the computer systems is proposed as the alternative method to the internet search of library catalog.

● **Keywords**

liberality

life-long learning

learning support system

"Ba"